

## 提言 2 ↓ 交通事故防止コンサルタントの視点から

# 事故を「自分ごと」に置き換える ドライブレコーダーによる研修を

株式会社ディクリエイト 代表取締役社長  
一般社団法人日本事故防止推進機構(JAPPA) 理事長 上西 一美

## 説明や説得では変わらない 人間の行動パターン

私は以前、タクシー会社の社長を務めていましたが、頻発する交通事故に悩み、どうすれば交通事故が無くなるのかについて考える日々を送っていました。そんなときに、インターネットでドライブレコーダーの存在を知りました。もう17年前のことです。当時、業者の方に他社で起きた事故映像を見せていただき、まず、自分の運転が怖くなりました。

「この状況なら、自分も同じ事故を起こしてしまう」と感じ、この映像は社員に見せるべきだと思い、すぐに導入を決めました。当時、ドライブレコーダーは、事故時の証拠という位置づけの商品でしたが、私たちの場合は、その取得された事故映像を教育に使い、事故抑止にしよう

に「自分はこんな事故を起こさないだろう」という気持ちが存在するからです。

私は現在、年間400回以上の研修を全国各地で行っています。その中で、一番意識をしていることが、受講者の行動パターンを変えることです。そのためには、納得していただく必要があります。人間は、説明や説得では行動を変えません。納得してはじめて変えるのです。

その納得に必要なのが、自分ごと置き換えることなのです。残念ながら、多くの事故防止教育では、この自分ごと置き換えることができていない印象を持ちます。運転者が他人の事故を自分ごとにする——。これが交通事故防止にまず必要なことなのです。

## 事故を疑似体験できる ドライブレコー映像

ドライブレコーダーが、事故を自分ごと置き換えることに非常に有効なのは、前述したタクシー会社での例で明らかです。そしてそれは、私のこの15年間のドライブレコーダーを用いたコンサルティングの成果にも表れています。これまでの顧問先からは、「交通事故の費用が軽減された」「交通事故の件数が半減した」などの声をいただいています。中には事故件数が8割以上、減少したという例もあります。

ドライブレコーダーがなぜ効果的なのか？ その理由は、実際の事故を映像で伝えられるという点にあります。今までの研修では、インリッヒの法則や空走距離など、理論

削減されたのです。

なぜ、これほど劇的に変わったのか？ それはひと言でいうと、「運転者が他人の事故を『自分ごと』に置き換えた」からです。

毎日のように悲惨な交通事故のニュースが流れるなか、自分も気がつけなれないけないと思ひ、実際に行動した方はどれくらいいるでしょうか？ 事故事例を見て、気をつけようと思うだけでは交通事故は無くなりません。そこから、実際に運転行動を変えていく必要があるのです。しかしながら、多くの運転者は他人の交通事故事例を見て、気をつけようとは思いつつ、実際には運転行動を変えません。その理由は、心の底



Profile

### うえにし・かずみ

平成6年、関西学院大学法学部法律学科卒業。大手企業を経て神戸市内のタクシー会社に入社。タクシー会社・バス事業立ち上げや運行管理、労務管理、人事(求人)、乗務員教育を担当する。また、ドライブレコーダーを使用して事故削減率70%減を達成。16年、そのノウハウを元に、有限会社ディクリエイトを設立し全国で事故削減のコンサルティングに加え、運輸業向けコンサルティング(監査対策、労務管理、人材募集)等も展開中。17年から、企業・団体等の自動車事故防止のための取り組みを支援する一般社団法人日本事故防止推進機構(JAPPA)理事長。現在、企業や地方公共団体など年間400回以上の研修をこなしている。(株)ディクリエイト <http://www.de-create.com>

的な話を、しかも文字ベースで伝えていました。もちろんイラストやグラフィック動画を使ってアプローチすることもありますが、しかしながら、このようなアプローチで受講者は、本当に自分ごとととらえるのでしょうか？ たとえば資料1上段のイラストでも事故事例の紹介は可能でしょうが、受講者は「自分はこのような状況で事故に遭遇したことがないので、イラストは、自分には関係ない」と、他人ごとととらえやすいのです。一方、ドライブレコーダーから切り出した下段の映像では、受講者はあたかも自分が運転している感覚となり、「本当にこのような事故が起きている」と理解します。その瞬間、受講者は、映像中の事故を自分ごととして置き換えるのです。

交通事故とは、運転者にとって想定外の出来事が起きているということとです。当然ですが、運転者は事故を想定して起こしてはいません。さらに、その想定はすべて自分の経験や知識に基づいています。しかし、「事故を起す」という経験を増やすわけにはいきません。だから、ドライブレコーダーの映像を自分に置き換えて見ることで疑似体験をしていただきたいのです。

### 資料1 イラストとドライブレコーダー映像の比較



イラストでは「事例の紹介」はできるが、リアリティが乏しいので受講者にとっては「他人ごと」のまま。一方、ドライブレコーダー映像は、受講者が自分で運転している感覚となり、「自分ごと」としてとらえられる

### 資料2 運転者を褒めるべき事例の映像



発進しようとしたら、死角である右後ろから子どもが急に飛び出し道路を横断した。急ブレーキで事故を回避した運転者を褒めるべき事例

## ベテランにこそ有効なヒヤリ・ハットの映像

ドライブレコーダーは、装着しただけでも事故抑止効果が期待できます。ただし、私がタクシー会社時代に導入した時のような極端に減少するケースは少ない気がします。それは単純に導入しただけで管理者が何もしない、いわゆる放置状態では、ある程度の抑止効果しか望めず、さらにその抑止効果も長続きしないからです。

そこでお勧めなのが、「ヒヤリ・ハット映像」の活用です。実は、私もタクシー会社時代、事故映像よりも、ヒヤリ・ハット映像のほうをよ

り多く活用していました。ヒヤリ・ハット映像を見せ続けること、本当に事故が減少していきました。当時はとにかく必死で、事故を減少させることばかり考えていたのが気づきませんでした。今考えると、このヒヤリ・ハット映像こそが、自分ごとととらえるポイントだったのです。

多くの運転者は、事故映像を見て、当然、その怖さを感じて運転を変えます。しかし、中には事故映像を見ても、自分ごとととらえない方もいます。そしてこの傾向は、それまで事故を起こしていないベテランの運転手に、特に顕著に見られます。その理由は、「運転に対する自信」です。特にプロドライバーは、事故を起こ

さないベテラン運転者が多く、実績が自信となり、事故映像を見ても、「こんな事故、自分は起こさない」というフィルターをかけて見てしまうため、他人ごととしてとらえてしまうのです。

しかし、ヒヤリ・ハット映像は違います。まず、ヒヤリ・ハットは事故を起こしていないベテラン運転者でも経験しているため、映像を自分の経験のように見ていきます。さらに同僚のヒヤリ・ハット映像であれば、自分も普段走行している道で撮影された映像が多いので、より強く自分ごとととらえていきます。現在、私どもの顧問先の研修でも、ヒヤリ・ハット映像を中心に用いていますが、それは、このような理由から



## 映像は全員に公開し共有 監視や叱責には使わない

では、ヒヤリ・ハット映像を定期的に取り出して、その映像を使えば交通事故がなくなるのか、といえば、実はそう簡単な話ではありません。

なのです。

私が過去に携わった会社で、こんな事例がありました。

運転者が帰庫すると、その運転者の当日のドライブレコーダー映像を抜き出して、管理者が一人ひとり面談をしていたのです。当時、私は本当に素晴らしい運用だと思い、事故が激減すると確信しました。ところが、事故は減少するどころか、横ば

いもしくは、若干、増加していったのです。私は不思議に思い、どのような面談をしているのかを確認に行きました。そして、面談の様子を見た瞬間、事故が無くならない理由がわかりました。

実は、その面談では、急ブレーキなど少しでも危ない映像があれば、管理者が一方的に叱りつけていたのです。これは、管理という建前の監視です。正直なところ、私もタクシー会社でドライブレコーダーを導入した当初は、運転者がどのような運転をしているかが気になってしまいい、監視という感覚が強かったかもしれませぬ。しかし、ドライブレコーダーを監視の道具として使うと、事故抑止どころか管理者と運転者の関係性を崩し、ひいては事故を増やす原因となります。

そこで、ヒヤリ・ハット映像は、まずは個人指導ではなく、当事者を匿名として運転者全体に公開することをお勧めします。個人面談で運転を改善するのは、当事者本人だけです。が、全体に公開すれば、一人のミスを運転者全員で共有でき、より多くの運転者の運転の改善も望めます。匿名で行う理由は、名前を出すと運転者は事故防止に対して会社に非協

力的となってしまふからです(もちろん、あまりにもひどいヒヤリ・ハット映像は、個人面談で改善を図ります)。

さらに、ヒヤリ・ハット映像を、「褒めること」にもぜひ使っていただきたいと思います。

たとえば私は、「ブレーキの質」がわかることが、ドライブレコーダー映像の利点の一つと考えています。同じブレーキでも、「相手が飛び出して、やむを得ず踏んだブレーキ」もあれば、「運転者が注意散漫で踏んだブレーキ」もあります。前者は、同じヒヤリ・ハットでも、よく事故を回避できた褒めるべき事例といえます。後者は当然ながら、褒められるものではありません。「ブレーキの質」とは、こういうことです。

ちなみに資料2は、顧客先で発生したヒヤリ・ハットの事例です。発進しようとしたところ、小学生が右後ろからいきなり横断したものです。「よく止まれた!」という、運転者を褒めるべき映像です。私は、顧問先の研修でも、このように良い事例は、どんどん名前を公開して共有します。だいたい、このような映像は、事故が少ない運転者から出ることが多いので、「こんな運転をしているから、

〇〇さんは事故を長年起こしていないのです」という言葉で締めくくります。

## 映像チェックは 管理者がやれる範囲で

よくセミナー受講者から、「ヒヤリ・ハット映像を見る時間がないので、簡単にできないのか」という質問を受けます。

こうした声に応えるため弊社では、クライアントのヒヤリ・ハット映像の分析サービスを行っています。ドライブレコーダーから取り出した映像に、プロの目線でコメントを付けて、管理者がすぐに使えるような教材に仕上げているのです。まずは、時間がない中でも管理者自ら映像チェックをやってみて、業務に支障が出るほど時間がかかるのかを確認すべきでしょう。

そこで必要なのが、「ハードルを上げないこと」です。私が在籍していたタクシー会社は、グループで認可台数が200台以上、そのすべての映像を一人でチェックしました。初めは気合を入れて、全車見ようと意気込みましたが、すぐにギブアップしました。全車見ようという考え

が間違っていたのです。

もちろん、全車、見るのが理想ですが、それよりも大切なのは、「やり続けること」です。全車見るのは不可能と悟った私は、月に全台数の約1割にあたる24台だけを見ることにしました。月24日の出勤日数で、1日に1台分の映像ならチェックできるという計算です。しかし、この分量でもヒヤリ・ハットは発生し、教材として十分使えます。

管理者の皆さんは、ぜひ、自分がやれる範囲でヒヤリ・ハット映像のチェックを始めてください。そして、やり続けてください。

## 運転者がやるべきことを 明確に伝えよう

最後に、私が研修で最も大事にしていることをお伝えします。

私が今まで顧問先で管理者が行っている教育を見て、一番感じるのは「表現の仕方が曖昧だ」ということです。多くの管理者が、「もっと慎重になりましょう」「もっと確認しましょう」「だろーう運転ではなく、かもしれない運転をしましょう」などと言いますが、結局、「今、この瞬間から何をやるべきなのか」ということ

が明確になっていないのです。

先般、滋賀県大津市で幼い子どもたちが犠牲になった痛ましい事故がありました。事故の概要は、多くの方がご存じだと思いますが、この事故から何を学ぶべきなのか、また、今の瞬間からどのような運転行動を取るべきなのか、ということについてはどうでしょう。管理者や講師の多くはおそらく、「無理な右折はやめましょう」と教育します。しかしながら、普段の運転の中で、無理な右折をしない運転者なら、この程度の表現では他人ごとにとどまり、運転行動は何も変わりません。直進車の観点からは、「右折車が無理な右折をするかもしれない」ということも頭に置き、慎重に交差点に進入しましょう」という表現になるかもしれません。こうした表現で、受講者は今の瞬間から何をやるべきかをイメージし、行動パターンを変えるでしょうか？ 私にはそうは思えません。

歩行者を巻き込む右折車と直進車の事故は以前から頻発しています。私の研修で使っている映像の中にも、車両が歩道に乗り上げ、歩行者に接触する映像がたくさんあります。私ならばその映像を使いながら、次のように訴えます。

「接触した車両がすぐに止まらないで、歩道に突っ込む事例には、ある共通点があります。それは、直進車がアクセルを踏んだ状態で、接触されていることです。もちろん、今回の大津の事故の原因は無理な右折です。しかしながら、子どもたちの命を守るために、直進車もできたことがあったはずですよ。それが、『たとえ青信号でも、アクセルオフで進入すること』です」。

貰い事故でも、その被害を最小限に抑えることが運転者の役目です。アクセルを踏み込んで交差点に進入し、右折車と接触、衝突して初めてブレーキへと踏みかえる。しかし、その踏みかえの間も車両は止まりません。本当に1秒もない時間ですが、この一瞬で救える命があるのです。

最終的には、運転者一人ひとりの行動パターンが変わらないと事故は無くなりません。そのためには、研修の場で運転者がやるべきことを明確に伝える必要があります。

そして、そのやるべきことを受講者に納得させる、落とし込むための手段として、ドライブレコーダーの映像は非常に有効なのです。ぜひ、ドライブレコーダーの映像を活用し、事故防止にお役立てください。